

## 日々新



### 堀合 文子

又、暮がやってきました。そして新年を。このくり返しは世の中の、社会の、宇宙の、くり返して大きなリズムをきざまながら、進んでおり、人間はその中に生活し、生きているのですね。くり返す事の大切さ、くり返す事によって人間は進歩しますが、後退する場合があります。そしてそれはマシネリ化を招いてしまうのでしょうか。

幼児教育の現場も、しかりで、時々自分を反省してしまいます。

幼児はあらた

現場にいられる先生方だったら誰もが感じられる事でしょう。二年或いは三年幼児を世話して卒業させ、又新入園児を迎える。その時、二年、三年前にこのようにしたから今頃はこのように、又今はこの事をと、考えるのは誰でもする事

で、それは経験が少ないと少いだけに自分の経験に頼り、むしろそこへ自分の安定感を置いてしまい、経験を生かす意味でも何の不思議もなく、相手の幼児の状態も考えずくり返してしまいます。又、経験の多いものはそれ以上の安定感を経験の上に置き、むしろ腕が上った位の自負を持ちながらくり返してしまい、むしろマンネリ化の方向へ。

ところが幼児は、一年前でも、その一年間の間の社会状況の影響は今の時代大変な事で、人間を年々に変化させています。

敏感な子、口先ばかりで行動のともなわなない子、情緒の不安定な子、言語の乏しい子、足の弱い子、空間の使い方を知らない子、自制のできない子、大人を小さくしたような子などなど。これらが強く出たり、人によっては事柄により弱く

でたりと様々ですが、びっくりする様な事をよいも悪しきも持っています。一見数年前よりも、まあおとなしいとか、手がかからない等のように見え、腰かけましょう、並びましょうと言えばやってくれる子どもたちは増えたようで、今年の子どもは手がかからないわ”と、四月喜んでいては大へん。そして、喜びながら平気で次の段階へと考えたら尚大へん。この事はよくある事でしょうが、幼児が常に人間として生まれて幼稚園や保育園へ来るまでに、年毎に違った社会状況の中に生活して来ているので同じ幼児教育方法では勿論子どもをだめにしてしまうし、幼児の本当の力を育てる事はできないのではないのでしょうか。

又、自分の経験上の考えか、信念か、自信か知りませんが、それにあわない子どもはみな問題を持つ幼児になってしまい、すばらしい能力も問題視のために育てるところか知らないうちにつぶしてしまいます。勿論子ども現場のものは時代が違ったから子どもたちも変って来た”とは誰しも気がつく事で頭では理解している事なのです。

しかし、新卒は新卒なりに学生時代長期で修得した学問を尺度として子どもを測ってしまい、経験を詰めばその経験で測ってしまいがちで、何れにしてもくり返しのおそろしさに

もなるのでしょうか。

幼児は、人間として常に成長しています。周囲よりいろいろと吸収しながら育っている事は言うまでもありません。その人間の力は明治時代も、大正時代も、昭和時代も変わらないでしょうが、いろいろの環境の影響により私どもの目の前にあらわれた幼児は大きな変化をしています。

その変化には明治、大正時代より、よき悪しき点として、いろいろな形として所有している事は言うまでもないので、それを明治時代に、大正時代に、すぎた昭和の時代の子どもにもどす必要はない事も又言うまでもありません。むしろ、私共が前進させなければ、前進してもらう力を育てなければならぬのではないのでしょうか。

誰しも意識して古い事をしようとは思いませんが、先生の”子どもを見る目”の違いが、そこに時代的、いや、時間的古さを表現してしまうのでしょう。現代に成長を重ねている幼児を後へもどすような幼児教育は互に注意したい大きな事の一つで、先生も常に前進し、新しい力をそなえてないといけないのでしょうか。幼児の見方はむずかしいものです。ああでもない、こうでもない、考えるのですが、先生自身の頭が動かない、働かないのでは困る事で、先生自身頭の回

常に新しく働かせる事が大事になるのでしょう。

そもそも、「子どもを見る目」ができてないといけなないので、文部省からも「子どもを見る目」との映画まで作られたように大切ですが、その見る目が個人差があるので、自分で正しくみているつもり、又は正しいと思わなくても或根拠はあります。が、やっぱり本当によく子どもをみたいですね、それは、単に「子どもをみる」、文で書くところのくり返しですがそれはむずかしい事で先生によっても見方が違うのです。その点も私共現場のものは常に新しい考えで、常に新しく新鮮な目でみる必要があるでしょう。自分の尺度に子どもをあわせてしまう事だけはしたくないと思います。

子どもの生活を外側から見ているは本当に子どもは見えないものです。子どもの生活にどっぷりと入りこまなければ見えないのです。子どもの生活に入りこむ事はとてもむずかしい事で、子どもになれ、子どもと同等の位置に自分をおく、など言葉では言ってみますがむずかしく、先づは、自分を忘れる事です、夢中になる事です。無我になる事です。常に先生の立場に自分を置くのでなく、この無になる事で子どもの生活にとびこみ、子どもと共に生活して、子どもと同等になる時、本当に子どもの姿、考え、行動が理解でき、本当の子

どもの言葉が聞えてくるのです。自分を意識し、無にならないければ子どもの世界に入っていない、先生と子どもの間に巾のある生活でしょう。

見えて、聞えてくれば、それに対する対処の仕方は正しい指導となって子どもたちを育てる糧となります。子どもたちはその時始めて先生と共鳴して考える事は考え、吸収するものは吸収して育っていったらいいのだと思います。

しかし、そこに難かしい事は、常にとっぷり幼児の世界にひたりすぎていると、その場面はよくても、他の場面の幼児も多くいますので、そこには外側からでも見なくてはならない場がある事です。いくら無になる事が大切だからといっても生活の中にいながらも、先生は自分の行動や気持などその場に応じて変えてゆかなければならない事が日常にはたくさんありますので、これを機会を捉えたり、機会、場面に応じて先生自身を使いわけてゆく事が大切で、これが保育技術の一つではないでしょうか。先生が生活の中に入りこめないと、又、子どもたちを尊重してやっている、充分にあそばせているといっても知らない中に先生中心になっている場合が一ぱいあるのです。そしてこれは経験を重ねたから、経験を重ねないからの問題ではないと思います。

やはり「あそび」は幼児に大切

子どもたちは生まれながらにして、いろいろの能力を持っている事は改めて言うまでもない事です。前述のように、その力を発揮した時にいろいろな社会状況、環境のために、影響を受けている事は申しました。やはり、持って生まれた個々の大切な力を引出してあげ、引出すだけでなく、引出した力を育てなければなりません。その時に、自分からいろいろと考え、工夫し、その場を判断して行動のできる子どもにも、自分の持っている能力を使って生活できる子どもにしたいものです。いくら時代が、時代が、と言っても、この事は人間として大切な事で、あの子どもたちが社会の一員に成長した時に大切で、これらの力を充分に活用して生活できる人になってほしいものです。

このように考えてまいりましても、帰する所は、幼児の生活である「あそび」を充分にさせ、その中で個々を育てる事にもどってしまいますが、時代がかわろうが、環境が変化しようが、この事は幼児と離せない大きな事実であり、大きな教育であります。このくり返しは大きく大きく原点となり幼児を大きくさせたいてくれます。

私共現場の人員はこの大きな原点をふまえて、常に先生の

頭を、体を、神経をきめ細やかに働かせて、常に新しく、常に前進した考えを持ちながら生活してゆかなければならない事と思います。それには先生としての自分の勉強をすべての事を最高にきわめてこそ、例えば、心理学、教育学、哲学、医学、理学、音楽、の学問をはじめとして、技術もピアノのその他楽器など、ダンスも、歌も絵も、制作もすべて最高に修得する事が必要で、それでいてこれをいかに使うかは先生の頭を働かせて実践する事で、最高の学問、技術を先に出したら大へんな事で、そのところが又大きく保育技術となる事でしょう。

× × × ×

暮の声を聞き年のくり返しと共にこんな事を自分に言いきかせていました。日々が新しく、日々に前進しなければ子どもたちと生活するわけにはいけません。暮の十二月、一年の振り返りと共に、次の年の希望を大きく大きく持って一時、一時前進する事が幼児教育の現場の大きな原動力となり幼児の中に流れてゆく力となってくれるのではないのでしょうか。除夜の鐘の音と共に前進です。自分の前進です。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)